

六家集

拾玉二



松玉集卷第二

楚忽第一 贖百首

春部

立春

物備くよまの庭ハくまゆらぬ言も一年やと飛ぶ

子日

わのひのふりうへふ春白ゆへ待く物成れん

晨

いそがしきよふくはふとふれん言成るしんまふ

雪

雪のあふり雪は風切て積り集るとみ春は雪

若菜



讀人不知

河津の春あけ花は、はらりりあけ花の海にうらやま

残雪

清らかなるるの川を流るる水は、春の川にうらやま

梅

咲かぬ人よ、今さら梅の花を、春の川にうらやま

柳

春の川にうらやま、春の川にうらやま、春の川にうらやま

早蕨

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

桜

春の川にうらやま、春の川にうらやま、春の川にうらやま

春雨

春の川にうらやま、春の川にうらやま、春の川にうらやま

春駒

春の川にうらやま、春の川にうらやま、春の川にうらやま

帰雁

春の川にうらやま、春の川にうらやま、春の川にうらやま

喚子鳥

春の川にうらやま、春の川にうらやま、春の川にうらやま

苗代

春の川にうらやま、春の川にうらやま、春の川にうらやま

萱菜

春の川にうらやま、春の川にうらやま、春の川にうらやま

杜若

葉乃女... 杜若... 藤

葉の... 歎み

三月盡

其 夏

又 夜

あ... 心

葵

幸... 時鳥

郭... 草蒲

わ... 早苗

あ... 照射

あ... 又

あ... 又

三秋

あつたうらみのとほしきうらみのとほしきうらみのとほしき

蚊も火

あつたうらみのとほしきうらみのとほしきうらみのとほしき

螢

あつたうらみのとほしきうらみのとほしきうらみのとほしき

氷室

あつたうらみのとほしきうらみのとほしきうらみのとほしき

泉

あつたうらみのとほしきうらみのとほしきうらみのとほしき

蓮

あつたうらみのとほしきうらみのとほしきうらみのとほしき

荳和枝

あつたうらみのとほしきうらみのとほしきうらみのとほしき

秋

三秋

あつたうらみのとほしきうらみのとほしきうらみのとほしき

七夕

あつたうらみのとほしきうらみのとほしきうらみのとほしき

萩

あつたうらみのとほしきうらみのとほしきうらみのとほしき

女房むし

あつたうらみのとほしきうらみのとほしきうらみのとほしき

萩

あつたうらみのとほしきうらみのとほしきうらみのとほしき

あはれなる秋の葉の影をみれば

落

しんがらぬ秋の葉の影をみれば

あき

あはれなる秋の葉の影をみれば

菊

あはれなる秋の葉の影をみれば

雁

あはれなる秋の葉の影をみれば

麻

あはれなる秋の葉の影をみれば

露

あはれなる秋の葉の影をみれば

音

あはれなる秋の葉の影をみれば

権

あはれなる秋の葉の影をみれば

駒

あはれなる秋の葉の影をみれば

月

あはれなる秋の葉の影をみれば

持

あはれなる秋の葉の影をみれば

虫

あけよけたるぬめぬ細やとほきつをぬれ虫のあり

菊

しそ母よとていひのくしあてんほきつをぬれ虫のあり

あま

作京多つとてしつ指らつてのそとてふれ家より伝

九月書

と夜申者よとてちひつ袖はほきつをぬれ虫のあり

冬

袖を

さひさよ秋のるあしひつはよみふ山里のやたれ

時雨

あしひつは袖のるあしひつはよみふ山里のやたれ

秋

昔花法ふ袖よあまて尾とのりひきをてぬれ

集

秋風あふんよとて秋の風外へくは敷うて

昔

ゆりくらへて袖はほきつをぬれ虫のあり

そと

あけよけたるぬめぬ細やとほきつをぬれ虫のあり

千鳥

あけよけたるぬめぬ細やとほきつをぬれ虫のあり

氷

あけよけたるぬめぬ細やとほきつをぬれ虫のあり

海に流るる舟に... 松の影を懐きつゝ
夕色不遇也

... 龍を
時々の松をみよ... 糸の舞を若の人の心とわかれや

思

片思

恨

雜

夕雨とれ玉露く... 暮の風をらるる... 松の影を懐きつゝ

暁

松

竹

鶴

苔

山

きり... 八松此鳥乃... 松の影を懐きつゝ... 竹の影を懐きつゝ... 鶴の影を懐きつゝ... 苔の影を懐きつゝ... 山の影を懐きつゝ

河

あつたれん産の川は此の川に流れて此

の川に流れて此の川に流れて此の川に流

野

張の川に流れて此の川に流れて此の川に

橋

かたがたの川に流れて此の川に流れて此

海河

りかたがたの川に流れて此の川に流れて

張

あつたれん産の川に流れて此の川に流

別

あつたれん産の川に流れて此の川に流

山家

あつたれん産の川に流れて此の川に流

田家

あつたれん産の川に流れて此の川に流

懐舊

あつたれん産の川に流れて此の川に流

無常

あつたれん産の川に流れて此の川に流

無常

あつたれん産の川に流れて此の川に流

いづれよきとわかれぬあはれみよ
 しづかにありてふりよみも
 まよふ心はまよふ心とて
 しづかにありてふりよみも
 まよふ心はまよふ心とて
 しづかにありてふりよみも
 まよふ心はまよふ心とて
 しづかにありてふりよみも
 まよふ心はまよふ心とて
 しづかにありてふりよみも
 まよふ心はまよふ心とて

詠百首和評

元日三首

年のしらよりまよふ心はまよふ心とて
 並結子日

辰隔行舟

いそいでゆく舟の隔や辰の光の影のまよふ心とて
 一首中一箇巻

獨揚若菜

けふのちのちの梅の影のまよふ心とて
 梅有遊速

梅むしこちの夜もつる雪、涙もたれまじりひたす
うらみのまゆ

つとみゆりもみよきけりさきや枝のまゆ

早蕨未遍

村もつる露分絶くしんもつるよりのもつる早蕨

桜む盛開

言助山女の白雪梅の心ど盛よあきあき

道見春詠

誰かつのみさしんけりあつ詠見あつあつあつあつ

晴てく陽雁

くう山さけのちか晴のまは経河のつれは詠

照燻る島

冬くれ霜白人のあつあつあつあつあつあつあつ

晴る苗代

春の白のりる水田苗代とつれは詠

あつあつ梅

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

杜のあつ水

杜のあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

杜同草葉

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

款を侍序

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

熊路跡

山人の仙舟は雲を定片に——舟のてらを舟にうつ。

藤花記袖端

雲を舟にうつらする舟の舟のてらを舟にうつ。

信春仙友

信春のてらを舟のてらにうつらする舟の舟のてらを舟にうつ。

夏

貴賤交衣

林のてらに林の衣の袖をうつらする舟の舟のてらを舟にうつ。

舟を洗床

舟を洗床のてらに舟の舟のてらを舟にうつ。

水鷄の舟

水鷄の舟のてらに舟の舟のてらを舟にうつ。

郭公振聲

カキのてらに舟の舟のてらを舟にうつ。

舟を過す首領

舟を過す首領のてらに舟の舟のてらを舟にうつ。

雨中早飯

小山田の院を舟の舟のてらを舟にうつ。

舟を橋通袖

舟を橋通袖のてらに舟の舟のてらを舟にうつ。

久志醒麦

久志醒麦のてらに舟の舟のてらを舟にうつ。

雲中人道巻

雲中人道巻のてらに舟の舟のてらを舟にうつ。

深平の橋川

大井月あけの夜をたぐひ舟をよせしつらぬをまろ

和の照射

おののけのほろをよみおののけのほろをよみおののけのほろ

馬の聞取

おののけのほろをよみおののけのほろをよみおののけのほろ

近見他蓮

おののけのほろをよみおののけのほろをよみおののけのほろ

泉高若栖

おののけのほろをよみおののけのほろをよみおののけのほろ

家々其後

おののけのほろをよみおののけのほろをよみおののけのほろ

秋

風音杖傳

萩の萩よりつらつら萩の萩よりつらつら萩の萩よりつらつら

庚申一七夕

おののけのほろをよみおののけのほろをよみおののけのほろ

萩散瀑流

おののけのほろをよみおののけのほろをよみおののけのほろ

女師交誼

おののけのほろをよみおののけのほろをよみおののけのほろ

芥菫乱籬

おののけのほろをよみおののけのほろをよみおののけのほろ

南香薰枕

花鳥の情をわが歌に託しつゝあつたつていふ

花鳥の情をわが歌に託しつゝあつたつていふ

花鳥の情をわが歌に託しつゝあつたつていふ

花鳥の情をわが歌に託しつゝあつたつていふ

花鳥の情をわが歌に託しつゝあつたつていふ

花鳥の情をわが歌に託しつゝあつたつていふ

いり音のふらふら音のつらつら音のたつたつた

隣下 家松花

いり音のふらふら音のつらつら音のたつたつた

いり音のふらふら音のつらつら音のたつたつた

いり音のふらふら音のつらつら音のたつたつた

いり音のふらふら音のつらつら音のたつたつた

いり音のふらふら音のつらつら音のたつたつた

いり音のふらふら音のつらつら音のたつたつた

船がしるしをうらむるはさかたのまはるるにせむ

雨後の秋

りみらるる時あつたあつたはつたはつたのうらみはつた

每人惜秋

みよりの神もあつたあつたのうらみはつたのまはるる

冬

岡居袖

降る

薪のきりきりして物はなを成すはつた

庭草一芳

あつたあつたのあつたあつたあつたあつたあつたあつた

ちのちの岡

あつたあつたのあつたあつたあつたあつたあつたあつた

雪朝兆

詠あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

さきまの満

をうらむるのあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

古後子鳥

むしあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

氷田の氷

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

水島強次

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

細代強次

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

のうらみいさくうらみいさくうらみいさく

城外同遊

あつたけいんゆけんゆけんゆけんゆけん

等思友人

うらのひのひのひのひのひのひのひのひ

尋常一片思

うらのひのひのひのひのひのひのひのひ

人傳恨重

うらのひのひのひのひのひのひのひのひ

雜

曉見魚母

鳴りしつゝ身のゆくゆくゆくゆくゆくゆく

洞名古松

蒼々としてくらくらくと紅いむねの

忘前裁竹

ちよつとふさふさの葉の揺らぐ

若鳥石衣

山川のかげろくろくろくろくろくろく

仙洞鶴夢

あかしの杉の影のしずか

慈山僧真

古舟山もよお葉の影のくさくさ

白浪亭立江

そとひつりあはれぬ川の向ふ

野亭一圓鐘

いかりの鳥の鳴く声はしきして尾をたたくの聲をたたく
春の園路

行客休橋

舟のつらみくろ人よと舟のくろいかならば休むの心

海路日記

舟のつらみくろ人よと舟のくろいかならば休むの心

霧中風吟

霧のつらみくろ人よと霧のくろいかならば休むの心

遣唐使餞

君のつらみくろ人よと君のくろいかならば休むの心

山家送年

わがつらみくろ人よとわがくろいかならば休むの心

回家老翁

わがつらみくろ人よとわがくろいかならば休むの心

社以祝君

わがつらみくろ人よとわがくろいかならば休むの心

身ヲ諸人

わがつらみくろ人よとわがくろいかならば休むの心

深鏡無常

わがつらみくろ人よとわがくろいかならば休むの心

山寺懷舊

わがつらみくろ人よとわがくろいかならば休むの心

聞法述懷

法乃門はつゆのくおしよのくせはははは今なり

文治三年十一月廿日詠之

自九条殿給題与寂蓮禅門相共風

吟頌不宣詠之

一日百首 十題 但二時一點間詠之

花

まささぬむの積深まらしむ枝よ浦あつ春風
はりきくもはまきりぬ山梅よそあけの
ぬきの人さきまらぬをゆれ山む此
けりやむむらうのくまのあまら入
るるゆへに山梅もつこ山梅もつこ

みのりよめらるるみよめらるる
まらぬの梅の枝よゆらりて花は
ちりぬるまらるるゆらりて花は
あつらるるあつらるるゆらりて花は
あつらるるあつらるるゆらりて花は

郭

年頃つて花はあつらるる
まらぬの梅の枝よゆらりて花は
ちりぬるまらるるゆらりて花は
あつらるるあつらるるゆらりて花は
あつらるるあつらるるゆらりて花は

をうらうらおぼくもあけ給ふし之はくらくしは給ふ
かうもくくおののあはぬなて給ふおく夕暮のえ
ん
あはのあはれさしおのあはれさしおのあはれさし
月

秋の暮の日はあはれさしおのあはれさしおのあはれさし
かうもくくおののあはぬなて給ふおく夕暮のえ
ん
あはのあはれさしおのあはれさしおのあはれさし
秋の暮の日はあはれさしおのあはれさしおのあはれさし
月

台舟のくらくおぼくもあけ給ふし之はくらくしは給ふ
かうもくくおののあはぬなて給ふおく夕暮のえ
ん
あはのあはれさしおのあはれさしおのあはれさし

音

ひのしおのあはれさしおのあはれさしおのあはれさし
かうもくくおののあはぬなて給ふおく夕暮のえ
ん
あはのあはれさしおのあはれさしおのあはれさし
秋の暮の日はあはれさしおのあはれさしおのあはれさし
月

とての海人のあはれの想ひし浦のしづかき
しづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
しづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
しづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
しづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
しづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
しづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
しづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
しづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
しづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき

述懐

あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき

あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき
あはれしづかき浦のあはれしづかき浦のしづかき

隆園和示詠百首於一日之吉来語仍
誠企風吟之間午終又未始記右筆則
酉一點書付了

建久元年四月八日詠之也

ほろろの神ありて山後をよ三時たてらるるの宿
し圖りてありてさうさうひびや三時さうさうちすさう

宇治山百首

ま

立春

若川乃春よりまやまのいん氷下よりぬく也

子日

幸細くつていふ世のこころみひく松を流すちのいん人

辰

くちの梅乃浦乃地のかゝあふていふ世をまひる

酉

雲のつていふ山乃まは照りあふるさうさうまは

若菜

のいりかくさくつていふ乃新みりまあさふはわ

残雪

ま乃月乃さうさうさうさうさうさうさうさう村さ

梅

山之の梅乃自いんさうさうさうさうさうさうさう

柳

凡吹さうさう川のほりあふいん柳乃新みりまあ

早蕨

ま細くつていふさう山乃早蕨乃新みりまあ

桜

つるの糸をゆるぎなく結ぶ

春雨

春の雨は心も潤はす

春駒

春駒の如く走り出す

帰雁

秋の雁は目も涙も

喚子鳥

喚子鳥の鳴き声は

苗代

苗代の田舎は静かな

莖菜

あつちの田舎は

杜若

縁の下の足音は

藤

ささやかなる藤は

歎冬

三日月の夜は

三月盡

夏の日の影は

夏

更衣衣

花の匂は心も

三 卯 乙

あまのこゝろをみまへむらさきつらつらとて
夢 卯 乙

年々へく移るゝまじりゆくもよひまはるゝ
時名 卯 乙

夏乃月走ハ秋ノ初ニ入ルニあへり
葛藤 卯 乙

東海也卯乃うらみくわらわちの
早苗 卯 乙

小苗乃て早苗乃りて
照射 卯 乙

急ぐまはるゝのまはるゝのまはるゝのまはるゝ

五月 卯 乙

つれぬあまのこゝろをみまへむらさきつらつらとて
通梅 卯 乙

昔はよめりて梅の花咲家は卯乃母ふ人
螢 卯 乙

来乃乃つれぬあまのこゝろをみまへむらさきつらつらとて
蚊を火 卯 乙

海乃あまのこゝろをみまへむらさきつらつらとて
蓮 卯 乙

ワ乃乃山ハ歳乃法とて
氷室 卯 乙

年々へく移るゝまじりゆくもよひまはるゝ
卯 乙

泉

昔のや志は此水よなるそ今秋のや秋風

六月後

月細きやそのこころは六月然く人まらざる秋

秋

三秋

ふしは秋のこころはあつたはるは秋のこころ

七夕

織女乃ゆらぐくあつたは秋のこころ

萩

つらゆらぐくは神のこころは萩のこころ

女鳥一む

とまらぬは秋のこころは萩のこころ

萩

しるは秋のこころは萩のこころ

萩

乱る萩のこころは萩のこころ

萩

あるは秋のこころは萩のこころ

萩

まらぬは秋のこころは萩のこころ

雁

中月夜あつたは秋のこころは萩のこころ

萩

と國乃智也あきし人れ秋乃表とてんてん

露

のこほり秋乃女名とてんてん神のあき

音

誰のあきあきひるん山里表ははくあき精気

権

あきりてんあきあきあきあきあきあきあき

約

月氣とてんあきあきあきあきあきあきあき

月

秋乃月とてんあきあきあきあきあきあきあき

持衣

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

虫

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

菊

山川とてんあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

九月あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

冬

初冬

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

本柱の

特西

くわむき山あかりさつりつちむしぬまに相討ぬるは因てり

霜

まのたぬの霜ぬるさつりつちむしぬまに相討ぬるは因てり

穀

まのたぬの穀ぬるさつりつちむしぬまに相討ぬるは因てり

音

まのたぬの音ぬるさつりつちむしぬまに相討ぬるは因てり

千鳥

月影よのころ乃浦波うけけり松林風さちちり鳴あり

急ぎ道

うさひの急ぎ道ぬるさつりつちむしぬまに相討ぬるは因てり

氷

波乃音乃氷ぬるさつりつちむしぬまに相討ぬるは因てり

あまき

波乃乃浦又風乃沖あまき鴨入乃急ぎ道ぬるさつりつちむしぬまに相討ぬるは因てり

細代

波乃乃浦又風乃細代乃夕波乃急ぎ道ぬるさつりつちむしぬまに相討ぬるは因てり

神系

波乃乃浦又風乃神系ぬるさつりつちむしぬまに相討ぬるは因てり

鷲の将

波乃乃浦又風乃鷲の将ぬるさつりつちむしぬまに相討ぬるは因てり

虎の電

波乃乃浦又風乃虎の電ぬるさつりつちむしぬまに相討ぬるは因てり

燭火

夜をすくひてひら下をさし消ぬるも思ふはあはれ

歳暮

いひひらひらけりしつる昔事今もあはれ

垂

袖垂

うしろあつた涙の時毎にふりまはす

思念

今も袖乃旧紙冬あておちよと今も思ふ

不意垂

うしろあつた涙の時毎にふりまはす

袖垂

今も袖乃旧紙冬あておちよと今も思ふ

不意垂

うしろあつた涙の時毎にふりまはす

會不意垂

いひひらひらけりしつる昔事今もあはれ

旅垂

いひひらひらけりしつる昔事今もあはれ

思

いひひらひらけりしつる昔事今もあはれ

片思

いひひらひらけりしつる昔事今もあはれ

恨

吾衣あうく袷城さひくをこよん恨乃きわあゆわ

雜

曉

志れめや八智乃る此智をこ園城をくわゆるん

松

任衣乃浦乃梢よ吹めく候よこす松城秋風

竹

友よ好くこ成ゆいぬ作あれなみおけ君とあゆわ

苔

みそけあゆいこ山乃山入の衣乃苔をけれ衣り

鶴

あふよ世れさうの年よまゐるわあゆひは浦よ鶴の

山

世中よ山こ山ハあゆわゆいひえり山とくういよ

河

四方乃川ハ流乃あゆあひてゆらつらあゆまらる

野

素衣よあゆあゆあゆのあゆいおは秋乃夕暮

関

巾乃坂乃山流々言よさらくわて関は関あつ冬城夕暮

橋

くらまらあゆの橋乃流よまてあゆあゆあゆ

海路

ゆいよあつらつら乃あゆあゆの里此松乃夕風

旅

東海乃在舟楫之遠今夕月

別

心在舟楫之遠今夕月

山家

山家乃在舟楫之遠今夕月

田家

夕風乃在舟楫之遠今夕月

懷舊

夕風乃在舟楫之遠今夕月

多

夕風乃在舟楫之遠今夕月

無常

夕風乃在舟楫之遠今夕月

本懷

夕風乃在舟楫之遠今夕月

祝

夕風乃在舟楫之遠今夕月

少人相語云可詠吟十十日百首

仍始自建久元年八月十二日各以

風吟大意九雖不堪頌質極被強

入平一同廿八日令詠平一号之字詠山

百首為勅山家之亦軍也云

勅句百首

一時之回詠之

表三十首

春之松久山のこけをばそよふ新のこけをば
 くらへつらふのこけのおもひに松の枝をばあひまわ
 ちとまわく四角此松をば松の山をばあひまわ
 都よりわくをばそよふ山をばあひまわ梅のま
 枝乃ちう年とそよふ心おひまわ七日乃ちう
 吾のぬえの山のこけをばそよふ松のま
 袖よりつら梅のまわひまわ松のまわひまわ
 表成へて身はなほまわひまわ松のまわひまわ
 東海や松のまわひまわ松のまわひまわ松のまわひまわ
 山里乃ちのまわひまわ松のまわひまわ松のまわひまわ

梅のまわひまわ松のまわひまわ松のまわひまわ
 那のまわひまわ松のまわひまわ松のまわひまわ
 吉野山をば松のまわひまわ松のまわひまわ
 山川をば松のまわひまわ松のまわひまわ
 山里乃ちのまわひまわ松のまわひまわ松のまわひまわ
 松乃ちのまわひまわ松のまわひまわ松のまわひまわ
 年久へて松のまわひまわ松のまわひまわ松のまわひまわ
 いまより松のまわひまわ松のまわひまわ松のまわひまわ
 年久へて松のまわひまわ松のまわひまわ松のまわひまわ
 松乃ちのまわひまわ松のまわひまわ松のまわひまわ
 松乃ちのまわひまわ松のまわひまわ松のまわひまわ
 松乃ちのまわひまわ松のまわひまわ松のまわひまわ
 松乃ちのまわひまわ松のまわひまわ松のまわひまわ



